GIANT ROBOTS
日本の巨大ロボット群像

The Core of Japanese Mecha Anime

ー巨大ロボットアニメ、そのデザインと映像表現ー

『鉄人28号』(1963年)をロボットアニメの嚆矢として、その後『マジンガーZ』(1972年)の大ヒット、新風を吹き込んだ『機動戦士ガンダム』(1979年)の影響下、現在に至るまで多数のロボットアニメが制作され、魅力的なロボットがデザインされてきました。
日本独自ともいえる進化と広がりを見せてきたそのデザインの変遷には、空想上の荒唐無稽なロボットという存在に、映像的な「リアリティ」を与えるために、デザインや設定上での創意工夫が凝らされ、多くのファンを魅了し続けてきました。
本展では、近年までのロボットアニメにおけるデザインと映像表現の歴史を、それらの「リアリティ」形成において重要な役割を果たした設定上の「メカニズム」と「大きさ」を軸に検証していきます。その上で「巨大ロボットとは何か?」を観覧者の皆さんとともに考えていきたいと思います。

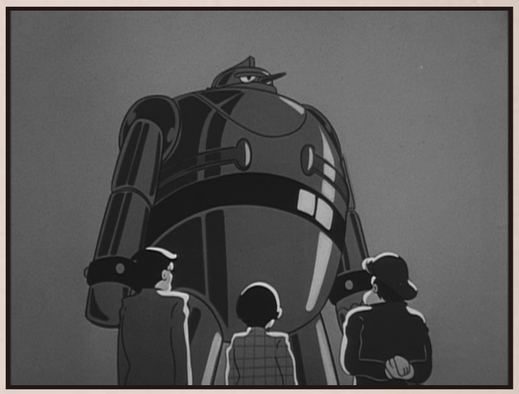
展覧会情報

会期	令和6(2024)年2月10日(土)〜4月7日(日) 10:00〜18:00
休館日	3月4日(月)、4月1日(月)
観覧料	一般 1,300(1,040)円、高大・65歳以上 1,100(880)円、中学生以下無料

＊( )内は20名以上の団体料金 ＊高校生(市内在住または在学に限る)は無料
＊身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と付添の方1名様は無料

「日本の巨大ロボット群像」展 公式HPはこちら
https://artne.jp/giant_robots/

○宇宙の戦士(1977年) 加藤直之・宮武一貴 ©スタジオぬえ



○鉄人 28号(1963年 モノクロアニメ) ©光プロダクション・エイケン

TOPICS 01 巨大ロボットの「メカニズム」に注目!

おもちゃへの展開を前提としながらも、そのデザインには、様々な工夫が凝らされています。デザインに隠された「メカニズム」の魅力を、デザイン画やアニメ劇中場面などから制作した造作物により紹介します。

TOPICS 02 ロボットの「大きさ」を体感できる!

1980年代になると、ロボットは実用機械レベルに小さくなり、同時にその表現はリアリティを増します。本展では、ロボットたちの一部分(あるいは全部)を、設定通りに引き伸ばし、その大きさを体感していただきます。

TOPICS 03 架空の存在であるロボットにリアリティを与えた「内部図解」

巨大ロボットが多くの子どもたちを夢中にさせてきた要因に、あたかも実在するかのような「リアリティ」が挙げられます。
その「リアリティ」を与えるため、まず、盛んに描かれたのが設定としての「内部図解」です。それは、アニメ表現にも影響が及び、複雑な内部メカが動く様子が丁寧に描写されるようになりました。本展では、この「内部メカ」に注目します。

見どころ

＼ 横須賀市出身 ／
宮武一貴氏による巨大絵画2点を展示!

横須賀市出身・在住のメカニック・デザイナー宮武一貴氏(スタジオぬえ)が、本展のために、高さ約2.6M×幅5.8Mの「巨大ロボットを巨大に描く《ー1970年代編ー》、《ー1990年代編ー》」2点の制作を横須賀美術館にて行いました。《ー1990年代編ー》は、横須賀会場で初公開となります。
日本のメカニック・デザイナーの草分け的存在である宮武氏が描く巨大ロボットワールドを展示室にて体感してください。

うち1点は、横須賀美術館で初公開!!

PROFILE

宮武(みやたけ) 一貴(かずたか)

横須賀市生まれ。SFクリエイター集団「スタジオぬえ」主幹の一人として活躍。『宇宙戦艦ヤマト』、『宇宙海賊キャプテンハーロック』、『超時空要塞マクロス』、『交響詩篇エウレカセブン』などの数多くの映像作品にデザインを提供。日本のみならず世界中のロボットシーンに絶大な影響を与えている。

←↑ 横須賀美術館での制作の様子

Corridart [コリダール]

横須賀美術館ニュース「corridart」vol.29
発行:横須賀美術館 〒239-0813 横須賀市鴨居4-1
Tel.046-845-1211
ホームページ https://www.yokosuka-moa.jp/

横須賀美術館ニュース
NEWS FROM YOKOSUKA MUSEUM OF ART
2024.1
volume. 29

「Corridart」(コリダール)とは、corridor(回廊)とart(美術)の二つのフランス語を合わせた造語です。横須賀美術館地階の回廊型のギャラリーにちなんで名づけられました。

[特集]
YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKU
往古来今/見えない泉をさまよいさがす

[展覧会紹介]
日本の巨大ロボット群像

[この1点]
上野泰郎(うえのやすお)《押し流される民族(みんぞく)》

[レポート]
スカビでおしゃべり

編集:横須賀美術館/令和6年1月発行
デザイン:tegusu Inc.
印刷:ニューカラー写真印刷株式会社
＊このニュースは8,000部作成し、1枚あたりの印刷費は約49.5円です
横須賀美術館の情報は公式X・Facebook、Instagram、YouTubeでもご覧になれます。

朝井閑右衛門〈薔薇(嘉靖青花唐子紋中壺)〉(絶筆)(部分)の施釉用レプリカ

レポート

アートに触れる鑑賞プログラム
スカビでおしゃべり 「絵からひろがる初夏の香り」

実施日:2023年5月6日(土) 10時15分〜12時15分、14時〜16時
ファシリテーター:大高幸(アート・エデュケーター)

横須賀美術館では、参加者のみなさんがファシリテーターと会話をしながら、さまざまな素材を五感で楽しみ、一緒に美術に親しむことができる鑑賞プログラムを開催しました。
第1弾は「絵からひろがる初夏の香り」と題して、初夏を感じさせる花や情景を描いた作品についておしゃべりした後、各参加者が絵から想像をひろげた香りの匂い袋をつくりました。
あっという間の2時間でしたが、作品とじっくり向き合い、わいわいと匂い袋をつくる時間はとても充実していました。これからも、楽しく“スカビでおしゃべり”する機会をつくっていきたいと思います。

1 イメージを膨らませる

視覚に障害のある参加者が、触覚や嗅覚をつかってこれから鑑賞する作品に関連する教材に事前に触れ、作品のイメージを膨らませているところ。

2 おしゃべりスタート

展示室に移動し、視覚に障害のある参加者のナビゲートで鑑賞作品を探します。見つけた後は作品の前でおしゃべりスタート!ここでも全員がさまざまな教材にも触れます。

鑑賞した作品:朝井閑右衛門《薔薇(嘉靖青花唐子紋中壺)》〈絶筆〉1983年/谷内六郎《葉のレントゲン》1977年 いずれも当館蔵

3 匂い袋をつくる

薔薇や橘の香りの粒などをブレンドして、初夏にちなんだお気に入りの匂い袋をつくります。

横須賀美術館では、障害のある、なしに関わらず参加しやすい、さまざまなワークショップを開催しています。

この1点

上野泰郎(うえのやすお)《押し流される民族(みんぞく)》

1964年 岩絵具ほか・麻紙 162.0×227.1㎝

地色となっている朱を塗りつぶそうと、胡粉の白色が大きな渦を巻いています。そのまわりには緑青色のいくつかの人のかたちが配され、さらに、画面の左側で炉の中の石炭のように黒く密集しているのも、それぞれ顔と表情のある、人間の群れのようです。タイトルから推し量るならば、彼らは大きな力に翻弄され、抑圧された人々なのでしょうか。

上野泰郎(1926-2005)は、染織家の父と、松岡映丘門下の日本画家である母との間に生まれました。幼い時から、絹と絵具を身近に感じながら育ち、1943(昭和18)年に入学した東京美術学校では、山本丘人の指導を受けます。環境と才能に恵まれた若き日本画家として順風満帆にみえた歩みも、終戦で大きな壁にぶつかります。社会的な価値観の転換によって、それまでの日本画の在り方を根本から考え直す必要に迫られたのです。少年時代に洗礼を受けたキリスト者であった上野は、信仰をよりどころとしながら、この困難な課題に正面から立ち向かっていきました。

1950年代から、上野は裸婦群像を主なモチーフとするようになります。旧来の日本画がまとってきた装飾性を排除しようと、衣服や頭髪などの要素をそぎ落とされていった裸婦はやがて、銅像のような緑の肌をもったひとがた―人間の本質を示す記号的存在となりました。また、技巧的な線描から離れるために、筆を用いずに指で描く(指頭画)ようになり、表現はよりプリミティブな、感覚を直接表すものとなってゆきました。

この作品には、同時代の美術界を席巻したアンフォルメルの影響も感じられますが、上野の作品はこの後も完全な抽象となることはなく、あくまでも人間存在についての考察を主題としていました。発表の5年後、上野は次のように述べています。「人と人との間にある憎悪、嫌悪、殺傷あるいは、愛情、寛容、抱擁、その他諸々の一人対一人、一人対他人、人間群対人間群というところにテーマを据えたいし、凝視してゆきたい。*」上野が作品に託した思いは時代を越えて、現在でも普遍的な問題を私たちに投げかけています。(Kt.K)

◇第4期所蔵品展で展示します。

横須賀美術館の所蔵作品の中から、毎回1点を選んで学芸員がくわしく紹介するコーナーです。

＊上野泰郎「群像と愛」(『三彩』245号、1969年6月)

特集　令和5年度第4期所蔵品展

YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKU

往古来今／見えない泉をさまよいさがす

田浦の谷戸に集うアーティストのまなざしの先にあるものとは

YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKUは、谷戸地域にアーティストを誘致し、アーティストと地域住民との芸術交流によって個性豊かなコミュニティの形成を目指す、横須賀市の施策のひとつとして、2018年からはじまりました。現在、4名のアーティスト―薬王寺太一、山本愛子、折原みと、水戸部春菜がこの地に集い、地域の人々との交流や谷戸の自然、そしてここでの制作を通じて、その表現を日々更新しています。令和5年度第4期所蔵品展では、田浦地域のこれまでとこれからに思いを巡らせながら制作する彼らの現在地を紹介すると同時に、アートによるまちの再生化・特色化を改めて考えていきます。ここでは、本展の開催に合わせて、各アーティストの思いとプロフィールを共にご紹介します。

展覧会情報

会期	2024年1月6日（土）～3月3日（日）
開館時間	10:00～18:00
休館日	1月9日（火）、2月5日（月）
会場	横須賀美術館地階・展示室8、展示ギャラリー
観覧料	一般380（300）円、高大生・65歳以上280（220）円、中学生以下無料 *（ ）内は20名以上の団体料金 *高校生（市内在住または在学に限る）は無料 *身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と付添の方1名様は無料
主催	横須賀美術館
協力	横須賀市都市部まちなみ景観課 アーティスト村（HIRAKU）創出事業HP▶

▲ HIRAKU　ロゴマーク

1 薬王寺（やくおうじ） 太一（たいち）

（陶芸家 / 土器作家）

2000	関東学院大学 文学部 社会学科 卒業
2000－	増穂登り窯（山梨）
2003－	イタリア Argille e dintorni studio（ボローニャ）
2006－	如庵窯（佐賀）Anagama project（リトアニア）
2018－	YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKUに参加

南仏ヴァロリスの博物館で出会ったメソアメリカの土器や土偶に大きな衝撃を受けて以来、根源的で普遍的な表現を模索し“縄文”に傾倒してきました。
浄火から産まれたその純朴な土の塊は、長い年月を経た今でもなおパワーを放ち続けており、時代や社会背景、あらゆるボーダーを乗り越え、対峙した者の心の内奥と深く対話する事が出来るのだという事を改めて実感させてくれるものです。その事は、これまでの創作活動のモチベーションともなってきました。
しかし現代に生きる者としては、縄文風土器を産むのではなく“今”を創造する事こそ“縄文”と向き合う事であり、明日へ繋がる事だと信じています。
本展で発表の『Lepton』シリーズは、ごく身近にある球体という形状をベースに現代社会で感受し得る様々な万象を収斂し、構築する試行錯誤の作業であり、また横須賀の深い自然を享受し、産み出された“今”を反映したいという想いを込めたものです。

《Quark》2017年

《Lepton》2022年

2 山本（やまもと） 愛子（あいこ）

（美術家）

1991	神奈川県生まれ
2017	東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了
2019－	ポーラ美術振興財団在外研修員として中国にて研修
2020－	YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKUに参加
2023	令和5年度群馬AIRアートプロジェクト招聘

糸を紡ぎ、植物で色を染め、美術館の空間におおきな弧を描く、天の糸を出現させてみたいと思いました。作品には、絹の工房と共同制作した絹糸や、はじめて自分の手で紡いだ絹糸も入っています。糸と光が生み出す陰影、植物で染めた色のうつろい。それらは異なるもの同士を繋ぐ「あわい（間）」のような存在だと感じます。制作過程では、横須賀と近代化にまつわるリサーチ、群馬県の製糸業リサーチと糸紡ぎの習得、ブルガリアでの滞在制作とワークショップを行いました。横須賀、群馬、ブルガリア。字面でみると関連性が見えてこないかもしれませんが、染織を通して現地の人々や自然環境に触れていくうちに、蚕や、鉄や、森や、水に出合い、思わぬ接続地点を見つけていく連続でした。それは私自身の常識やしがらみをときほぐす作業でもありました。テーブルの作品では、制作過程で集めたカケラや音を展示しています。ぜひ、ゆっくり眺めてみてください。

《AllthingsareinFlux》2019年

《BORO-Blues＃2》2019年

3 折原（おりはら） みと

（漫画家 / 小説家）

1985	漫画家デビュー
1987	小説デビュー
1990	『時の輝き』を刊行、110万部のベストセラーとなる
2021－	YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKUに参加
2023	横須賀、秋谷を舞台にした児童小説『うみねこ館の四姉妹』出版 現在、横須賀・田浦を舞台にした新作小説を構想中

26年前に、東京から逗子に移住してきて、湘南を舞台にした作品を描くことが多くなりました。今まで、鎌倉、逗子、葉山が舞台の小説を出版。次は、横須賀を舞台にしたいと考え、取材のために市内を散策するうちに、何かに導かれるように、田浦のアーティスト村と出会いました。
深い緑に囲まれた静かな谷戸は、私が今まで思い描いていた横須賀とは、全く異なる場所のようです。まるで時が止まっているかのような、不思議な空気感に心を掴まれ、ぜひ、この場所を舞台に小説を書きたいと思いました。
HIRAKUに参加させていただき、谷戸のアトリエに足を運ぶようになって、3年余り。田浦の自然、空気、周囲の方達との交流の中で、私の心には、新しい物語が生まれつつあります。

『時の輝き』
1999年、講談社文庫

『孤独なあなたの愛し方
美智子さまが教えてくれた幸せの法則』
2022年、主婦と生活社

『うみねこ館の四姉妹
①わたしたち、4人で生きていきます！』
カバーイラスト原画　2023年、ポプラ社

4 水戸部（みとべ） 春菜（はるな）

（美術家）

1995	神奈川県生まれ
2018	東北芸術工科大学大学グラフィックデザイン学科卒業
2020	「第23回岡本太郎現代芸術賞」入選（岡本太郎美術館、神奈川）
2021	「群馬青年ビエンナーレ2021」ガトーフェスタハラダ賞（群馬県立近代美術館、群馬）
2021	個展「don't try」（西武渋谷店、東京）、個展「town」（galleryN、愛知）
2022	個展「Happy End」（IDÉE 自由が丘店、東京）
2022－	YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKUに参加

JR田浦駅から田浦泉町を片道20分ほどかけて往復するうちに、日が経つに連れて、心象風景にモヤのような違和感がありました。谷戸地域に囲まれ、そこで暮らしながら制作するにつれ、冒頭でのモヤの正体がわかり、それはリサーチし着目していきたいテーマとなりました。自然豊かというワードを聞く度に、引っ掛かり、暗い道や、長細い階段を見つける度に、身近でありながら、恐れ、現代においてはどことなく目が離せないワードのはずが、直接的な言葉が浮かび上がらず過ごしていました。
横須賀市にいると、何処となくそのワードが根付いていて、当たり前のようにそこにあるからか、改まってテーマとしての言葉では出てこなかったそれは、年表をみる限り田浦の始まりからの歴史とかなり密接な関係であり、HIRAKUの場所も、歴史を遡るとその為のものでした。時代が変わるにつれ、その為のものが今は文化的な場所へと変貌しました。起こりうる表現が制限されることへの可能性と、平和ボケする私に、感じていた「違和感」について、取り組もうと思います。

《running drawing》2021年

《town》2021年

YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKUとは？

横須賀市内には、「谷戸（やと）」とよばれる山に囲まれた地形が多くあり、静かな住宅地として利用されてきました。横須賀市では2018年から、廃止された市営住宅（市営温泉谷戸住宅）の一部を再利用したHIRAKUの整備を、地域住民のみなさんとともに進めてきました。現在は、この展示で紹介する4人の作家が拠点を置き、地域に根差した制作活動が行われています。「YOKOSUKA ART VALLEY HIRAKU」は、このアーティスト村の愛称であり、「ひらかれた場所」「五感をひらく」「関係をひらく」などの意味が込められています。

▲ アーティスト村　鳥瞰写真

市営住宅跡地で地域に向けたワークショップを開催

HIRAKUでは、老朽化した市営住宅を改修し、作家の居室やアトリエとすることに加えて、ワークショップルームやギャラリーとしても整備し、再活用しています。改修は、薬王寺氏の母校である関東学院大学の、空き家再生の取り組みを行っている「KGU空き家プロジェクト」の学生の皆様や地域の方にご協力いただきました。
各アーティストは、HIRAKUを拠点に地域住民や小中学校などを対象としたワークショップを開催するなどし、芸術交流によるコミュニティの活性化を図っています。